2024 年 3 月 31 日
宮崎中部教会イースター礼拝
牧師　乾元美

エゼキエル書 37：26～28
ヨハネによる福音書 20：19～23
「平和があるように」

【招詞】詩編 68：20～21
【讃美歌】２５「父、子、聖霊に」
【詩編交読】詩編３２編
【赦しの宣言】イザヤ書 55：7「主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。
わたしたちの神に立ち帰るならば／豊かに赦してくださる。」
【讃美歌】３２７「すべての民よ、よろこべ」
【祈祷】
【聖書】エゼキエル書 37：26～28、ヨハネによる福音書 20：19～23
【説教】「平和があるように」
＜復活の主の日＞
　今日は、十字架に架かって死なれたイエスさまが、復活されたことをお祝いするイースターです。
　先ほど読まれた、ヨハネによる福音書 20：19 には、「その日、すなわち週の初めの日の夕方」とありました。「週の初めの日」。これが、イエスさまが復活なさった日です。
　「週の初めの日」というのは、ユダヤ教の暦の表現で、今のわたしたちのカレンダーで言えば、日曜日に当たります。イエスさまは、金曜日に十字架につけられ、死んで、お墓に葬られ、日曜日に復活なさったのです。
　それで、イエスさまを救い主であると信じた人々は、復活の日曜日を「主の日」と呼んで、集まって神さまに礼拝をささげるようになりました。今、わたしたちキリスト教の教会が、毎週日曜日に礼拝をするのも、それを受け継いでのことなのです。
　わたしたちは、イエスさまが復活なさった時代から、毎週、復活の日曜日を「主の日」と呼んで礼拝し、イエスさまの復活をお祝いしているのです。
　ですから、本当は、イースターは今日だけではなくて、毎週の主日礼拝ごとに、お祝いをしているのだと言っても、過言ではありません。
　それほどに、イエスさまの十字架の死と、復活の出来事は、教会にとって、わたしたちの救いにとって、最も大切な出来事の一つなのです。

＜復活とは＞
　さて、イエスさまの十字架と復活の出来事は、約 2000 年ほど前に、確かにこの世界で起こった出来事です。
　それは、わたしたちのために成し遂げられた、神さまの救いの出来事でした。

まず、イエスさまの、十字架の出来事がありました。2000 年前に、イエスという人が、裁判にかけられ、十字架に架かって処刑され、死なれたのです。
この出来事があった、という事実だけなら、もしかすると、誰でも信じることが出来るのかも知れません。
でも、それだけではありません。イエスさまの十字架の死の出来事は、神さまの救いの出来事だったのです。
十字架で死なれたイエスという方は、神の独り子であり、その十字架の死は、わたしたちすべての人間の罪を償うためでした。
このイエスさまの十字架の死によって、わたしたちは、神さまに対する罪を赦され、神さまに近づくことが出来るようになり、神さまと共に生きることができるようになったのです。…しかし、そのことは、中々簡単に信じられるものではないでしょう。

だからこそ、十字架で死なれたイエスさまは、神さまの御力によって、死者の中から復活させられたのです。それは、イエスさまが成し遂げられたことが、神さまの救いの出来事であると、証しするためなのです。
十字架に架かり、死なれたイエスさまは、確かに、神の御子であり、わたしたちの罪を背負ってくださり、赦しを与えて下さるお方である。そして、そのイエスさまは、神の御力によって、死にも打ち勝つことがお出来になるお方である。
だから、このイエスさまの救いを信じるなら。このイエスさまが、共にいてくださるなら。わたしたちも、最後には死に引き渡されるのではなく、神さまの御力によって、復活させられ、神さまと共に永遠に生きる命をいただくことができる。
イエスさまの復活は、そのことを、わたしたちに保証してくださるのです。

＜復活を信じられない弟子たち＞
しかし、実際には、復活という出来事そのものが、わたしたちにとっては信じがたい、受け入れがたいことなのではないでしょうか。
わたしの友人も、「イエスが十字架で死んだっていうのは本当にあったかも知れないけど、復活っていうのは、絶対に信じられない」と言っていました。
そして、それは、イエスさまの弟子たちでさえ、そうだったのです。

ヨハネ福音書 20：19 には、こうありました。「その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。」
イエスさまが復活なさったその日。弟子たちは、集まって、自分たちのいる家の戸に鍵をかけ、閉じこもっていました。
しかし実は、この直前に、弟子たちは、イエスさまが復活した、という知らせを、すでに耳にしていたのです。

少し前の 20：1 以下には、マグダラのマリアが、イエスさまが葬られたお墓に行ったら、その中にあるはずのお体が無くなっている、と言うので、ペトロともう一人の弟子がそれを確かめた、ということが語られています。
彼らは、お墓に行って、そこが空っぽになっていることを、その目で確かめたのです。
しかもマリアは、さらにその後、復活のイエスさまと直接出会い、「わたしは主を見ました」と弟子たちに告げ、イエスさまからの伝言も伝えたのです。
しかも何より、イエスさまご自身が、十字架に架かられる前に、ご自分が死んだ後に復活なさることを、弟子たちに予告しておられたのです。
それでも、弟子たちは誰一人、イエスさまの復活を、信じられなかったのでした。

なぜなのでしょうか。…それは、弟子たちにとって、イエスさまの死が、圧倒的に確かな、目の前の現実だったからです。
死は、わたしたちにとって、不可逆的です。そして、すべてを奪い取ってしまいます。その人の肉体を。生命を。人生を。存在を。…誰も、死に抗うことはできません。
わたしたちもまた、絶対的な死の力を。そして、それに対する無力さを。よく知っているのではないでしょうか。

弟子たちは、まさに、そのようなイエスさまの死に、直面していたのです。
心から愛し、慕い、信じていたイエスさまが、苦しみに満ちた、悲惨な死を遂げられたのです。そこには、大きな悲しみと嘆きが。耐えがたい喪失感がありました。
しかも、それだけではありません。弟子たちを更に苦しめていたのは、それぞれ皆が、十字架を前に、イエスさまを裏切り、見捨て、逃げてしまった、ということです。
そして、イエスさまが死んでしまった今や、それはもう、取り返しがつかないことです。彼らは一人一人、どうしようもない後悔と、恥ずかしさと、情けなさに、打ちひしがれていたのではないでしょうか。
更には、追い打ちをかけるように、イエスさまの弟子であった自分たちも、仲間として捕らえられ、殺される可能性がありました。そんな、自分自身に迫りくる危険への恐怖もあったのです。
何もかも失い、空っぽになり、先のことも何も分からない。そこにはただ、悲しみと、不安と、恐れがある。弟子たちは、そのような状況だったのです。

死の力。自分の弱さ。外からの危険。これらは、圧倒的な、目に見える、手に取れる、確かな現実でした。
それは、死の力が、世の力が、弱い、罪深い自分たちを、完全に支配している。そう確信させるのに十分でした。
ですから、彼らはもはや、イエスさまの約束を信じられません。神さまの御力に期待しようともしません。復活を待ち望むこともありません。
そうして彼らは、家の戸に鍵をかけて、閉じこもっていたのです。

それはまるで、彼らの心と同じです。傷つき、恐れ、不安で一杯の弟子たちは、自分で自分を守るために、心を閉ざし、頑なになり、うずくまって、動けなくなっているのです。

＜来られる復活のイエスさま＞

しかし今日の聖書の箇所には、このように、罪と死の支配に打ちひしがれている弟子たちが。そしてわたしたちが。どのようにそこから解放され、イエスさまを信じるようになるのか。そのことが示されています。

19 節の後半にはこうありました。「そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。そう言って、手とわき腹とをお見せになった。」

…そうです。鍵をかけて閉じこもる弟子たちのところに、復活のイエスさまの方から、入って来られた。そして、彼らの真ん中に立たれたのです。

戸を閉じて鍵をかけた家の中に、どのように入ってこられたのかは分かりません。

しかし、確かに、あの十字架に架けられて死なれたイエスさまであることは、「手とわき腹をお見せになった」とあることから、分かります。

イエスさまは、弟子たちの真ん中に立って、つい先日の十字架で、釘打たれた手と、槍で刺し貫かれたわき腹の傷をお示しになったのです。

弟子たちが、復活のイエスさまと出会うことが出来たのは、弟子たちが勇気を振り絞って、覚悟を決めて、鍵を外し、戸を開いたからではありませんでした。復活のイエスさまを、探し求めて、見つけ出したからではありませんでした。

弟子たちは、わたしたちは、もう、動けないのです。悲しみに沈み、不安に苛まれ、恐れに慄いているのです。そして、うずくまって、閉じこもることしか出来ないのです。

でも、そこに、復活なさったイエスさまの方から来てくださるのです。わたしたちの、闇に覆われた現実の只中に、共に立ってくださるのです。

この方は、十字架で死なれたお方です。わたしたち人間の、苦しみを、痛みを、悲しみを、死を、すべて味わわれたお方です。

わたしたちの救い主は、高みから下界を見下ろして、わたしたちの苦難を眺め、ちょこっと手を差し出すようにして、救ってくださるのではありません。

まずイエスさまは、神の御子であられるのに、罪人であるわたしたち人間と共にいるために、まことの人となって、天から低く降って、この世に来られました。

そして、罪人のわたしたちよりも、さらに低く降って下さり、わたしたちの代わりに、罪をすべて担い、苦しみをすべて担い、死をも担ってくださって、下から支えるようにして、救ってくださるお方なのです。

イエスさまが、わたしたちの苦しみも、悲しみも、罪も、死も、すべてを引き受けてくださった。そして、今や、そのことを成し遂げて、勝利して、復活して立っておられるのです。

この方が、わたしたちと、共にいて下さるのです。この方が、わたしたちの涙を拭い、傷を癒し、復活なさったその神の御力で、わたしたちを立ちあがらせてくださるのです。
わたしたちは、こうして、すべてを成し遂げた上で、今、目の前に立ってくださるイエスさまを、わたしの救い主として、受け入れるだけなのです。
差し出された救いを、罪の赦しを、復活の約束を、ただ、受け取るだけなのです。

…わたしたちは、このようにしてしか、救われることが出来ないのです。このようにしてしか、救いを信じることが出来ないのです。
しかし、十字架による救いの御業を成し遂げ、復活なさったイエスさまは、喜んで、そのようにしてくださいます。わたしたちの閉ざされた心に、来てくださり、真ん中に立ってくださり、語りかけてくださる。わたしのために受けてくださった十字架の傷跡を示して、「あなたがたに平和があるように」と言って下さるのです。

＜平和があるように＞
聖書が語る「平和」とは、ただ争いがない状態や、穏やかな生活のことを指すのではありません。
まことの「平和」とは、神さまとの間の平和です。わたしたちを愛し、守り、救ってくださる神さまが、いつも共にいてくださることが、わたしたちの本当の平和なのです。
わたしたちが、世の力の支配ではなく、罪の支配ではなく、死の支配ではなく。御子イエスさまの十字架と復活によって証された、神さまの愛と恵みと命のご支配の中に、置かれているのだと確信できること。
今も、これからも、生きるときも、死ぬときも、復活のイエスさまが、わたしと共にいてくださること。
これが、わたしたちの、本当の「平和」なのです。

…さて、さっきまで閉じこもっていた「弟子たちは、主を見て喜んだ」とあります。
でもそれは、ただ、生き返った！良かった！というような喜びではないでしょう。それは、胸が痛むほどの悔い改めを伴う、もっと深い喜びに違いありません。
だって、弟子たちの方が、イエスさまから離れたのに。裏切り、背き、罪を犯したのに。イエスさまの方から、弟子たちのところに来てくださったのです。そして、「あなたがたに平和があるように」と言ってくださったのです。それは、赦しの宣言に他なりません。
弟子たちは、復活のイエスさまと出会って、分かったのです。自分たちのすべての罪を、イエスさまは引き受け、そして、赦してくださったということ。イエスさまに受け入れられているということ。愛されているということ。そして、自分たちを圧倒していた死の力を、神さまの御力は、打ち破ることができるということが、分かったのです。
弟子たちは、十字架に架かり、復活なさったイエスさまが、まことに神の御子であり、まことに自分たちの救い主であることが、本当に、はっきりと、分かった。
弟子たちの喜びは、その喜びなのです。

＜外へ＞
　さて、21、22 節には、こうあります。「イエスは重ねて言われた。『あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。』そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。『聖霊を受けなさい。』」
　息を吹きかける。これは、創世記で神さまが人間をお造りになった時に、その鼻に命の息を吹き入れられ、それによって人間が生きるものとなった、というところを思い起こさせます。
　ここでイエスさまは、弟子たちに息を吹きかけ、聖霊を与えられました。それは、新しい命を与える霊です。
　弟子たちは、聖霊を受けて、復活のイエスさまと共に歩む新しい命、罪を赦された者として歩む新しい命、神さまの子どもとして生きる新しい命を与えられたのです。
　それは、罪と死に支配された命ではなく、神さまの愛と恵みのご支配に生きる命です。
　弟子たちは、イエスさまの十字架と復活によって罪を赦され、聖霊によって新しい命を与えられ、神さまのまことの平和を与えられて。そこでやっと、戸を開いて、外へ出て行くことが出来るのです。

　そしてさらに、イエスさまは、こう言われました。「だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」
　これは、弟子たちに人の罪を赦したり、赦さなかったりする権限が与えられた、という意味ではありません。人の罪を赦すことがお出来になるのは、十字架に架かって罪を贖って下さったイエスさまだけです。
　でも、弟子たちには、このイエスさまを宣べ伝える働きが、与えられたのです。
　聖霊を受けた弟子たちと、イエスさまはいつも共におられます。ということは、弟子たちがイエスさまの救いを告げるところには、そこに、復活し、生きておられるイエスさまご自身もおられるのです。そして、そこでまた、イエスさまと出会った者に、イエスさまによる、罪の赦しの出来事が、新たに起こっていくのです。

　今、このわたしたちの礼拝においても、生きておられる、復活のイエスさまが、真ん中に立っておられます。そして、「あなたがたに平和があるように」と語りかけてくださり、聖霊を注いでくださいます。
　そして、わたしたちは、共にいてくださるイエスさまを証しする者として、新しくされ、外に出ていき、イエスさまの救いを告げる者、証しする者とされていくのです。

　イエスさまと共に生き始めたわたしたちは、もはや、目の前に迫りくる、世の力や、罪の現実や、圧倒的な死の力に、支配されることはありません。
　わたしたちは、神さまの御力こそ、罪にも、死にも勝利してくださるということを、イエスさまの十字架の死と復活によって、示されているからです。

たとえ、わたしたちが、嘆きの中にあっても、困難の中にあっても、動けなくなったとしても。イエスさまが、「あなたがたに平和があるように」と語りかけ、それを実現してくださいます。わたしのために、十字架で苦しみを受け、死ぬことさえ引き受けてくださるイエスさまが、いつもわたしと共にあって、慰め、守り、支えてくださいます。

そして、復活に現わされた、死をも打ち砕く、その神の御力で。イエスさまは、わたしたちを立ち上がらせてくださり、息を吹きかけ、聖霊を与え、新しい歩みへと踏み出させてくださるのです。

【お祈り】

天の父なる神さま　み名をほめたたえます。

イエスさまの復活を、心から喜び、賛美します。復活によって、イエスさまの十字架の死が、わたしたちの罪を赦すためのものであったこと。復活によって、イエスさまが、わたしたちの罪と死の支配を打ち破り、勝利してくださったことを示されました。

イエスさまは、「あなたがたに平和があるように」と、閉じこもったわたしたちの内に来られ、真ん中に立ってくださいます。

どうか、わたしたちが、イエスさまを、わたしの神、わたしの救い主と、信じることが出来ますように。

そして、イエスさまと共にある、まことの平和を、歩んでいくことが出来ますように。

復活の主イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讃美歌】３２３「喜び祝え、わが心よ」
【信仰告白】ニカイア信条
【聖餐】
【讃美歌】７３「主よ、平和のうちに」
【十戒】
【献金】６５－１「今そなえる」
【主の祈り】
【祈祷】
【讃美歌】２６「グロリア、グロリア、グロリア」
【祝福】主があなたを祝福し、あなたを守られるように。
主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。
主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。
主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、
あなたがた一同と共にあるように。アーメン